

フェアトレードな生活 —その1—

フェアトレードとは、海外の生産者がつくったものを公正な価格で買い取り、生産者の自立を図る新しい貿易のカタチ。
“生活のなかの国際協力”を実践されている方をご紹介します。



狩野知代(かの・ともよ)さん 東京都世田谷区

「コーヒーは生産者の努力の結晶。フェアトレードのものだと、どういう人がつくって、どういう流れをたどってきたかが全部わかるので、より気持ちを入れてコーヒーに向かうことができるんです」

小学生のころからのコーヒー好き。結婚して上京後、「自分に合うコーヒー」を探していた狩野さんがフェアトレードの東ティモール産「ピースコーヒー」に出合ったのは3年ほど前。カフェや焙煎の仕事始めてからでした。

「出どころのしっかりわかるコーヒー豆を使いたい」とフェアトレードの豆を何種類か試したものの、味覚や、味と価格とのバランスに納得できないうちに、ピースコーヒーのサンプルを入手。試してみると、「すごく、おいしかった」。

ピースコーヒーをはじめ、出どころのはっきりした10種類近くの信頼できる生豆を購入して焙煎し、こだわりを持ったカフェに卸すようになった。今、力を入れている取り組みは、コーヒーや焙煎に関する講座。味覚や淹れ方などとともにフェアトレードにもふれています。

「単にキリマンジャロがいいとか、単においしければいいとかではなく、どれが自分に合うコーヒーかを考える。どういうコーヒーを選択しようかと思うと、生産地や生産者についての情報も必要になってきます。現地にはなかなか行けないので、流通や販売にかかわっている団体がきちんと現地に入っているか、しっかりとした志をもっているかも大事なポイントになります」

そんな狩野さんにとってのフェアトレードとは？「根本的にコミュニケーションだと思えます」と、さらりと。人柄を感じさせる気負いのない言葉が返ってきました。



©Tomoyo Kano

PWJでは、オンラインの「ピース ウィンズ・ショップ」などを通じて、フェアトレードに取り組んでいます。収益は、PWJの活動に役立てられます。 <http://www.peace-winds.org/shop/>

狩野さんが展開する自家焙煎コーヒー「グlaubell」のホームページ: <http://www.glaubell.net/>



peace winds JAPAN

支援のプロを、世界の現場へ

終わらない水不足

—アフガニスタンの現実—

乾いて白茶けた丘がどこまでも続く。草も木もなく、照り返しが容赦なく目を刺す。一步ごとに体の水分が奪われ、土ぼこりでのどがガラガラになる。7月20日、私(平井)と同僚の児島淳は、アフガニスタン・サリプル州のハルダール村から水源までの水くみに同行した。そこで見たのは、少年たちの肩にのしかかるアフガニスタンの水不足の現実だった。

【ピース ウィンズ・ジャパン (PWJ) アフガニスタン事務所 平井礼子】

少年たちが支える家族10人の生活

午前9時45分、ロバに乗った少年6人に大人が付き添い、約8キロ離れたボガビ村へ向け出発した。大人が同行するのは、臓器目的の誘拐の噂があるからだという。ロバの背には約40リットル入るブリキ缶が2個。計80リットルの水が、1家族10人前後の1日を支える。

ハルダール村の周辺には川や井戸がなく、雨期の間に貯めた水が枯れる夏場は、毎日の生活用水を遠くの水源に頼るしかない。少年たちが水くみに行くのは、彼らにはまだ畑仕事ができないからだ。

しばらく行くと、遠くボガビ村の緑が見え始めた。少年たちは自作の歌を歌いながらロバを操る。「水くみが嫌になることは？」と聞くと、10歳のアブドゥル・アジズは一瞬真顔になって言った。「必要なことから、嫌だなんて考えてられない」。

正午すぎ、気温42度。暑さで頭が痛い。ようやく川辺の泉に着いた。しかし、2時間半かけて目指した水源は、直径50センチほどのくぼみに細々と水が湧いているだけだった。少年たちは休む間もなくロバに水をやり、付き添いの大人がバケツでせせせと水を缶に入れる。

私たちはここで別れた。少年たちは今度はロバを引き、淡々と歩いて行く。往路は下り坂だったが、帰りは上り。ハルダール村まで3~4時間はかかるだろう。「えらいなあ」。背中を見送りながらそう思った。

炎天下の水くみは、次の雨季が訪れる11月ごろまで休みなく続く。



もくもくと進む子どもたち



同行して歩く児島



水場でロバに水を飲ませる

支援地レポート

東ティモール

治安悪化のため首都ディリから東部3県に逃れた避難民への支援を行うため、7月にスタッフ2人を日本から現地へ派遣。7月下旬にコメ配布を実施しました。現地の状況、ニーズに合わせた支援を行う予定です。状況は厳しいですが、レテフォホでの「ピースコーヒー」収穫は、生産者組合「カフェ・タタマイラウ」を中心に順調に進んでいます(情報は、8月上旬現在)



モンゴル



保護者面接を行い、児童保護施設「ホットマイル」=写真=で生活する39人中、27人が家庭に戻ることができました。残る12人は、大学進学なども支援する「ベルビスト・ケアセンター」で自立の道を探ります。家庭に戻った子どもやベルビストに移った子どもの支援は続けますが、ホットマイル事業は終了いたしました。長期間のご支援ありがとうございました。

イラク

1996年のPWJ設立以来、さまざまな支援活動にあたってきたイラク北部クルド人自治区出身のスミコ(澄湖バラン=2005年に日本国籍を取得)が8月、イラクで建設関連のビジネスを起こすために帰国。「住民のために学校や病院を建てたい。利益を出してPWJに寄付したい」。日本とクルドをつなぐため、ときどき来日予定です。写真は96年、来日直後のスミコ(右)。





あまりにも小さな泉に頼る人びと

下り坂の比較的楽な、片道みの同行でした。それでもボガビ村に到着したころには、足が重く、乾燥で汗も出ない状態でした。ハルダール村はまだ近い方ですが、水源まで片道4~5時間かかる村もあります。

子どもたちは道々、素敵なお顔を見せてくれました。しかし、その小さな肩にのしかかる責任は重く、彼らが水を運ばなければ家族は生活できません。イサックがタンク1杯の水すらくめず、「泣いてしまう」と漏らしたのは、その重責を実感していることの表れではないでしょうか。

ハルダール村をはじめ周辺の乾燥域の村々が頼りにしているボガビ村の泉は、あまりにも小さな泉でした。これが枯れてしまったら、ハルダールの人びとはどうするのでしょうか。このような小さな泉に多くの人びとが頼らざるを得ない現実に、アフガニスタンの水資源や人びとの生活基盤の脆弱さが表れています。

私は現地で、水資源の調査を進めています。降水量や川の水量、地下水の流量などを調べて、少しでも有効な水利用計画を立てることにつなげるためです。貯水槽の建設や修復などと合わせ、なんとかアフガニスタンの人びとの生活基盤を強くしたい。そんな思いをあらためて強くした1日でした。(PWJアフガニスタン事務所 児島淳)

深刻な干ばつ被害に対応検討

アフガニスタンは今年、雨期にあたる冬と春の降雪・降雨不足により、深刻な干ばつに見舞われています。7月25日には、干ばつ被害への支援を募るため、アフガニスタン政府と国連機関が緊急アピールを出しました。サリプル州など、生活を天水(雨水)に依存する北部地域の被害は甚大です。

天水域では、雨期の降水量が少なかったために、6月時点ですでに大半の村落で飲料水が枯渇しています。小麦などの主要作物の収穫はほとんどなく、食糧難が予測されています。来期の作付けのための種子モミの確保も難しくなっていて、支援が行われなければ、来年の収穫期以降まで干ばつの影響は続くでしょう。

村落部の人びとが、飲料水や支援を求めて村を離れ、再び国内避難民化することが懸念されています。人びとが一度、村を離れてしまえば、今まで住民や援助団体、現地政府、国際社会が行ってきた復興努力は中断されます。

PWJのアフガニスタン支援事業はサリプルの干ばつ避難民キャンプ支援から始まりました。被害軽減と対策実施のため、PWJとしても呼び掛けや関係機関との協議を強めています。



干ばつの被害にあつた豆を手に取る農民

少年たちの素顔

今回、ボガビ村までの道を同行したのは、6~12歳の6人の少年たち。夏から秋の数カ月間、彼らの「仕事」に休みはありません。学校のある日も、早朝か、正午の終業後に水くみに行くのだそうです。「水が足りなくて缶が一杯にならない時は、悲しくて泣いてしまうこともある。でもそういう時は仲間が助けてくれるんだ」と、ムハンマド・イサック。

水をブリキ缶に入れた後、「帰る前に水遊びしないの?」と聞いてみました。彼らは、近くで戯れている近所の子たちを横目に「水が入ってロバも重いから、もう帰らない」と、少し寂しそうな顔を見せました。



アブドゥル・アジズ
年齢 10歳
家族 18人家族
好きな科目 ダリ語
将来の夢 お金を稼げるようにお医者さんになること

ファゼル・ハック
年齢 10歳
家族 9人家族
好きな科目 理科

ムハンマド・イサック
年齢 12歳
家族 8人家族
好きな科目 歴史



アミール・ムハンマド
年齢 10歳
家族 11人家族。お父さんを亡くしている
好きな科目 地理

グル・ムハンマド
年齢 6歳
家族 11人家族。
アミールの弟。

ハビブラ
年齢 7歳
家族 8人家族。お父さんを小さいころに亡くしている。無口でおとなしい。

知っていますか?

水洗トイレ1回分の水で...

アフガニスタンの人たちが使っている水の量を想像できますか? 避難民キャンプなどの場合、国連などが定める緊急時の最低基準は1日1人7リットル。緊急時の飲料水の必要量としては、1日1人3~4リットルという基準があります。一方、日本の水洗トイレで、使用後に流される水の量は通常10~14リットルです。

村に生きる アフガニスタン発

カルタベル村で5年生を担当する教師ハジ・モハマッドさん(26歳)

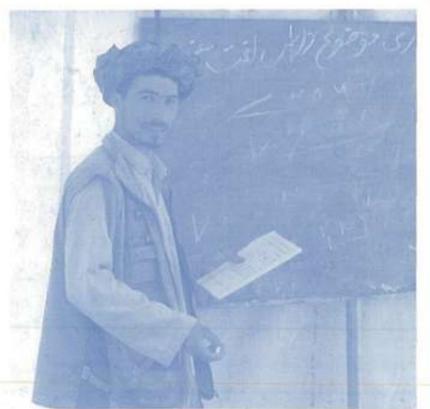
PWJの事務所のある地方都市サリプルから車で1時間、ロバだと3時間かかる険しい山道の向こうにカルタベル村はある。雨が降ると土砂崩れですぐに通れなくなる「道」だ。この村でPWJは、貯水槽の建設などの支援活動を続けている。破壊された学校跡地に建てたテントが、現在、モハマッドさんが教えている「学校」である。夏は40度、冬は零下になるテントの中で、子どもたちに国語、算数、理科を教えている。子どもたちが使うのは、短くなったエンピツだ。

教師になって3年目。2001年の9・11米同時テロ後、この村に帰ってきて、ムッラー(宗教指導者)の下で勉強して念願の教職に就いた。「教えることに誇りを感じている」と穏やかな目で語る。

「子どもたちは、みんな、「学校が大好き、勉強も好き!」とっています。家から学校まで1時間以上歩くのもうれしそうです」

実はモハマッドさんは2001年以前に兄を失っている。兵士たちに連れて行かれ、そのまま消息が途絶えた。「今はそんなこともなく平和に暮らせるようになった」と、静かに語る。

貧しい村。水への不安はつきまとう。PWJが支援した貯水槽が農業生活を支える大きな一翼を担っている。「町へつながるちゃんとした道路と、あとはちゃんとした校舎を持つ学校があれば」と、遠くを見て小さくつぶやいた。カルタベル村はまだあちこちに壊れた建物の残骸が残ったままだ。



アフガニスタン支援にご協力を

たとえば約20000円で、20世帯に1カ月分の飲料水を提供できます。

郵便振替をはじめ、銀行振込、インターネット上でのクレジットカードによる寄付も可能です。詳しくはホームページ、またはお電話0120-252-176(通話料無料)で。

<郵便振替>
口座番号: 00160-3-179641
加入者名: ピースウィンズ・ジャパン
※アフガニスタン特定寄付の場合は、通信欄に「アフガニスタン」とお書きください。

<ホームページ>
<http://www.peace-winds.org/>



メディア掲載報告

中日新聞 7月15日朝刊に、東ティモールで支援活動を続けるPWJスタッフ中島純の記事が掲載されました。

支援者サービスの窓

PWJの支援活動は、たくさんの支援者のみなさまと一緒にくり上げるもの。このコーナーでは、支援者のみなさまの声や反響をご紹介します。

PWJに届く郵便振替用紙の通信欄には、「アフガニスタンの人たちの一人でも多くの笑顔がみられるように」「アフガンで頑張っている平井礼子さんに応援のメールを送ります」などのメッセージが添えられています。

また、6月24日にNTTコミュニケーションズとの協力で開催したイベントで、アフガニスタンに駐在する平井とIPテレビ電話で対話した子どもたちからも、感動の声が次々と届いています。

「今日初めてアフガニスタンについて良く考えました!」「これから募金活動に協力したいです!」「平井さんに質問できてうれしかったです!」「アフガニスタンの人々へ!大変だけど頑張ってください!」「TV電話で話げたことはすごい事だと思います。PWJについて初めて知ったことが多かったです。もっと知りたいと思いました」

いただいたこれらの声は支援者サービス担当者や東京事務局内だけでなく、世界各地で活動しているスタッフにも伝えています。アフガニスタンの平井は「全国の支援者の方々と一緒に支援活動をしていることを、あらためて実感します。いい刺激をいただき、初心に戻って、さらに支援を続けていきます」と話しています。

新しいピース ウィンズ・ニュースについての感想も、ぜひお寄せください。

お知らせ

世田谷区から渋谷区へ~東京事務局が移転します

8月28日(月)から新しい事務局で業務を行います。電話番号、ファックス番号も変わります。ご注意ください。

[PWJ新・東京事務局]
〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-2-15 第二ベルプラザ
TEL: 03-5304-7490 FAX: 03-5304-7342
ホームページ: www.peace-winds.org
Eメール: meet@peace-winds.org